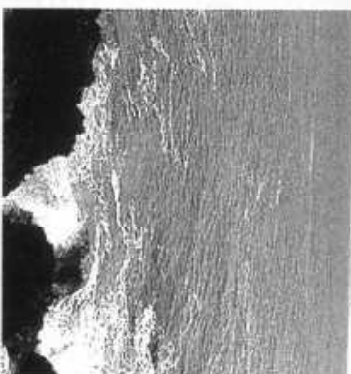


(『丹後半島歴史紀行』瀧音能之、三船隆之著より)



新井崎の

徐福伝説



新井崎から見る冠島(右)と雀島(左)

紀元前二二一年、中国の統一に成功した秦王の政は、新に都した。この一世の英雄秦の始皇帝は方士徐福を召して不老不死の霊薬を求めることを命じた。

当時、神仙思想が流行し、仙丹に七返八還の法があつてこの仙丹を服すると不老不死となることができるといわれた。仙丹は、三神仙（渤海にある蓬萊・方丈・瀛州）に仙人が仙丹を煉り不死の薬を蓄えているといわれた。

始皇帝は、この神仙にいたことがあるという方士（神仙の術をよくする道士）徐福に仙丹を求めることを命じたのである。

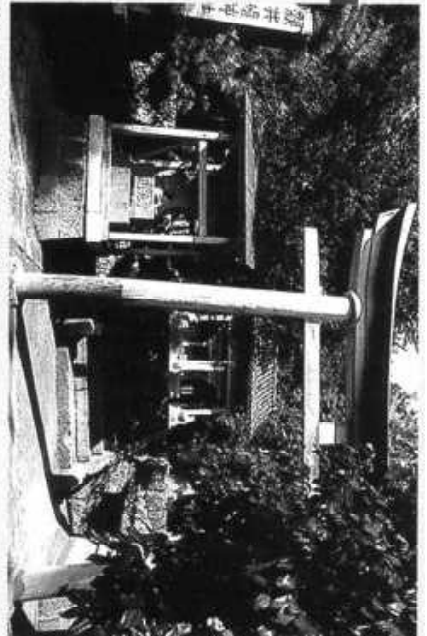
新井崎には、古くから徐福信仰があり、地区住民は徐福を産土神として祀り、新井崎神社の祭神として崇拝している。口伝によると、七代孝靈天皇の時代に秦の始皇帝が不老長生の神薬を求め方士徐福がこの地を易筮によつて予知し漂着した。漂着した場所は、新井崎のハコ岩で云々とある。この地で徐福の求めた神薬とは九節の菖蒲と黒莖の蓬である。徐福は、その後里人をよく導いたので推されて邑長となり、里人の仰慕の的となつて死後産土神として奉祀されるに至つたと伝えられている。

徐福を祀る新井崎神社は、昔から海上安全と漁業の神として信仰をあつめ、又病気の平癒、特に「はしか」の神様として近郷近在からの参詣者が多く、その願掛け願済ましのカネノ緒（願い事を書いた木綿）が非常に多く神前に吊り下げられている。

神社の真東に正対して冠・雀の二島があつて徐福の思想である神仙思想をそのままに現わしているのも識る者にとつては興味深い。



徐福が漂着したとされるハコ岩付近



徐福が祀られている新井崎神社

◎特集／徐福を訪ねて

平成十七年八月

歴史研究

たんごじよふくこう

丹後徐福考

石倉 昭重

(京都府会員)

徐福が初めて姿を現すのは、前漢の司馬遷（前四五～八六）書いた『史記』である。徐福東渡のことは、この中の秦始皇本紀に三ヶ所・淮南衡山列伝に一ヶ所登場する。

以後『海内十州記』『後漢書』『三国志』や唐の時代に入って「李白」や「白居易」など漢詩の中にもとり入れられている。我が国では九八〇年頃の源順の『宇津保物語』が初とされるが、『源氏物語』『今昔物語』『平家物語』『神皇正統記』『太平記』などにもその記述が見える。徐福は童男女三千人五穀の種子・百工を伴って東渡しその地に留まって王となったというが、その他「平原広沢」はどこか、我が国には二十におよぶ伝承地がある。また古史古伝といわれるものの中にもその影を落としているものもあれば、その祖をたずね

ると徐福に辿り着くという家系も存在する。

しかしそれら総て考古学的、科学的根拠にとぼしく、伝説の域を出ていない。本稿では、伝承地の一つ丹後半島の伝説を考察する。

丹後の徐福伝説は大筋で二つある。一つは昔から語り継がてきた口伝であり、他は千二百余文字からなる漢文の『新大明神口碑記』である。

口伝はいう。中国を統一した秦王政は、始皇帝と名乗り咸陽に都し長生不死の仙薬を求めた。当時、神仙思想が流行し、仙丹にも七返八還の法があつて、この仙丹を服すると不老不死となるといわれた。仙丹は三神山にいる仙人がこれを煉り蓄えていた。始皇帝はこれを徐福に命じたという。時は人皇七代孝靈天皇の御年、徐福は易筮によつてこの地を予知し登陸した。その場所は新井崎のハコ岩であつた。徐福は里人をよく導いたので推されて邑長となり、死後産土神として祀られた。徐福を祀る新井崎神社の創建は長徳四年（九九八）神徳は海上安全と漁業、そして病気の平癒である。

《原夫、丹之後州与謝郡澄江里新大明神者震旦秦始皇帝奉侍之童男女也》に始まる新大明神口碑記、ここでは神社の祭神を童男女としている。次いで登陸した集団と怪しんで来意を問う原住民邑長との問答が続く、またこの地を竜宮城と同所にして異名なりと位置づけ娑婆世界の七十八年は、竜宮城の

一昼夜也として現世と異界の超自然的時間の推移を論証し竜宮城の有様を、昔菩薩聖衆記に曰くとして法華経を説き、そして終りに本地を釈迦如来とし、権現として素盞鳥尊を登場させている。《我等者伊弉册尊第四神素盞鳥尊日本為祇園内神為有情利益化現明神者也詔畢》と結んでいるが、これは明らかに『備後国風土記』を引用したものに相異なる。そして実に「贅記」が続く、これは列子の「湯問篇」をかかっている。則ち、岱輿・員嶠・方壺・瀛州・蓬萊、の五山を述べるが、この五山は海に浮いているために潮波と共に絶えず上下に揺れ暫くも静止することがない、というところで終わっている。

この口碑記は、安政六年この年に流行病によつて多くの死者があつた。この災いから脱れるために村人の願いによつて著されたと考えられ、その作者は玉林寺法地開山戈山玉峯であつた。

徐福伝説はあくまでも伝説、証拠となるものはないと前記した。しかしその中でこの伝説を科学しようとする動きが全くないわけではない。大阪府堺に在住する筆者の知人で、緯度からこれに近づこうとする人がいる。彼は北緯三十五度四十分をその柱としてそこからこの問題が解き明かされないかと考えた。徐福は中国のどこから出航したのか、名乗りをあげている港は多いがその中で琅邪は有力な候補地の一つである。琅邪台で徐福は初めて始皇帝と相まみえた。ここそこ

の物語の出発地であり、その緯度が北緯三十五度四十分なのである。

地図の上北緯三十五度四十分上に定規を置き東方に目を移すと朝鮮半島につき当たり、さらに東へ伸ばすと日本海、そして海を渡るとそこは丹後半島である。そしてさらに日本列島内陸部を東へ向かうと富士の山に至る。

丹後半島はもちろん、富士山も有力な伝承地であり、これが同緯度に並ぶ。

幾十艘の大船団を率いる徐福が目的地も決めずに出航したとは考えられない。彼は九年間の歳月を費して充分な準備をした下見も行ったであろう。戦国時代の末期、中国では北極星の高度から正確な緯度は測定出来たといわれる。徐福は各船の船長に目的地についての教育を行った。その基本は北緯三十五度四十分であり、それは琅邪で実地で確認出来たのである。琅邪を出た船団は、途中朝鮮の南海島、そして耽羅島（済州島）に寄港した。徐福の大船団が、いつ別れ分かれになったのかはわからない。しかし黒潮本流に乗った船は富士山に辿りついたし、対馬海流に乗った船は新井崎に登陸した。

◆筆者紹介Ⅱいしくら・あきしげ
78歳。京都府与謝郡伊根町在住。

新大明神口碑記

原^レ夫丹^ノ之後州與佐郡澄^ノ江^ノ里新大明神^ハ者震且秦^ノ始皇帝奉侍^ノ之
童男女^{ナリ}也實^ニ當^レ日本^ノ人皇第七代^ニ孝靈天皇^ノ御宇^ニ焉蓋^ニ始皇帝好^ミミ
學^フ長生不死^ノ之仙術^ヲ其^ノ方^ヤ也朝服^シ金丹石髓^ヲ暮^ニ飲^ム玉漿酒瓊^ヲ以^テ
欲^ス求^{ント}真人不死^ノ之神藥^ヲ九莖芝^ヲ九節菖蒲^ヲ不老延齡^ノ藥餌^{ナリ}也故^ニ
敕^シ命^ス童男寡女^ニ而言^フ日域丹後與郡^ニ澄^ノ江^ノ里與^ニ龍宮城^ニ同所^ニ而異名^{ナリ}
也汝等^ニ去^テ此^ノ真人^ノ之靈藥^ヲ可^シ尋^チ得^ル來^ニ儻^シ不^レ然^ラ則^チ勿^レ歸^ル焉童男
寡女^{美^ヲ}敕^シ而得^ル得^ル航^シ海^ニ來^リ著^シ岸^ニ千澄^ノ江^ニ時^ニ澄^ノ江^ノ村長怪^シ
而且問^フ云^ク答^ニ以上^ノ上件^ノ事^ヲ矣頃間談^ニ咸陽宮等^ノ事^ヲ曰^ク先^ニ始皇帝都^ニ
京^ヤ也周迴壹萬八千三百八十里^{ナリ}也其^ノ中^ノ縱橫十八里^{ナリ}劃^シ而是^ニ為^ス內裡^ト
焉彼^レ咸陽宮^ハ者行^フ政道之殿^ニ也東西九町南北五町高^サ有^リ三十六丈^{ナリ}
大床^ニ其^ノ下雖^モ立^ニ五丈^ノ之旗^ヲ尚^モ不^レ及^ビ也矣以^テ金作^リ日^ヲ以^テ銀作^リ
月上^ニ以^テ瑠璃^ヲ瓦^ヲ葺^キ七霽^ヲ以^テ熒^々然^リ其^ノ地形^ヤ也鋪^キ瑠璃砂五十萬
斛^{ナリ}真珠砂三十萬斛^{ナリ}而高^サ築^キ之^ヲ四方^ハ以^テ鐵^ヲ築^キ地^ヲ於^ニ百丈^ニ矣鴻鴈^屬自^ニ
北路^ニ來^リ時^ニ有^リ飛行自在^ノ之障^ヲ故^ニ開^キ牖^ヲ而通^ス之^ヲ謂^フ之^ヲ屬門^ト巨細
省^ス耳^ニ抵^テ來^リ千^ニ此^ノ里^ニ我^ノ心^ヲ懷^キ猶豫^ヲ竟^ニ未^レ決^セ所以^ハ如何^{ナリ}者今^ニ此^ノ
澄^ノ江^ノ與^ニ龍宮^ニ各別^ニ也真人^ノ之靈藥^ヲ面^ニ雖^モ現在^ニ前^ニ實^ニ視^ル者^ノ幽^シ似^シ
遊^ル絲^ヲ正^ニ知^ル者罕^ニ於^ニ麟角^ニ知^ル求^メ而難^キ獲^ル乎嗚呼^ハ不^レ親^ミ咸陽宮^ヲ
唯^ニ隱^ニ目^ニ中^ニ悲^シ哉不^レ歸^ル千^ニ本國^ニ常^ニ懷^キ憾^ヲ心^ニ裡^ニ而^モ已^レ非^ニ夢^ニ未^レ
由^リ到^リ咸陽宮^ニ非^ニ幻^ニ不^レ得^ル拜^ス始^ニ皇帝^ヲ紅淚^ヲ千行^ニ濕^キ鬢^ヲ丹誠^ヲ萬
緒^ヲ亂^ニ綫^ヲ絲^ヲ于^ニ斯^ニ不^レ知^ル去^リ所^ヲ焉歎^シ然^リ見^ル蓬萊^ヲ是^レ即^チ童男寡女
顯^ル現^ル之^ニ處^ニ也而^モ後^ニ於^ニ屏風^ニ巖^ニ二^ツ岩^ニ等^ニ有^リ申^ス申^ス如^シ天^ノ天^ノ如^シ天^ノ時^ニ
燕^ニ居^ル焉乃^チ村長^又問^フ云^ク如^シ彼^ノ龍宮^ニ鮮^ニ矣知^ル者^ノ欲^ス為^ス末^ニ世^ノ之^ニ證^ヲ據^ト
願^ハ得^ル委^ニ說^ススル^ヲ耶答^フ云^ク高山^ノ漠漠^ニ深谷^ニ迤^ニ邐^ニ玉樹^ノ瑞草^ノ暉^ニ常^ニ榮^フ
環^ニ耽^ニ堂^ニ宇^ニ皆^ニ綴^キ明璣^ヲ翠璫^ヲ一^ニ楹^ニ櫺^ニ煥^ニ耀^ニ若^シ布^ニ金^ニ鈿^ニ異^ニ香^ニ氤^ニ鬱^ニ滿^ニ
其^ノ庭^ニ戶^ニ精^ニ華^ニ絕^ニ妙^ニ非^ニ世^ノ所^ニ有^リ天^ノ氣^ヲ和^ニ適^ニ偏^ニ如^シ春^ノ熙^ニ比^シ彼^ノ咸陽宮^ニ
豈^ニ啻^ニ天^ノ壤^ニ哉我^ノ等^ノ侍^ニ龍宮^ニ城^ニ將^ニ謂^フ一^ニ時^ニ許^リ此^ノ國^ノ日^ノ月^ニ已^ニ過^リ
七^ニ八^ニ年^ヲ矣昔^ニ菩薩^ノ聖^ノ衆^ノ記^ニ云^ク龍宮^ニ城^ニ為^ス體^ニ東^ニ方^ニ有^リ大^ニ河^ニ其^ノ廣^サ三^ニ百^ニ
六^ニ十^ニ丈^{ナリ}餘^リ其^ノ深^サ五^ニ百^ニ八^ニ十^ニ丈^{ナリ}餘^リ也波^ノ浪^ノ激^ニ翻^ス三^ニ十^ニ丈^{ナリ}餘^リ其^ノ河^ノ邊^ニ有^リ

樹^ノ高^サ二^ニ千^ニ七^ニ百^ニ餘^ニ丈^{ナリ}其^ノ樹^ノ指^ス東^ニ枝^ニ花^ノ開^ク時^ハ為^ス春^ト又^ニ南^ニ枝^ニ花^ノ開^ク則^ハ
夏^ト也向^フ西^ニ枝^ニ葩^ノ發^ク時^ハ為^ス秋^ト又^ニ北^ニ枝^ニ葩^ノ發^ク則^ハ冬^ト也此^ノ樹^ノ也^ハ不^レ
能^ハ截^ル之^ヲ若^シ強^ニ而^モ觸^ス斧^ノ鉞^ヲ則^ハ紅^ニ色^ノ水^ノ自^リ木^ノ中^ニ流^リ送^リ恰^モ如^シ大^ニ瀧^ノ水^ニ
而^モ生^ル類^ノ皆^ニ迷^ニ惑^ニ矣讀^ム誦^ス法^ノ華^ノ經^ヲ則^ハ彼^ノ紅^ニ色^ノ水^ノ忽^チ止^リ焉又^ニ娑^ノ婆^ノ世^ニ
界^ノ七^ニ十^ニ八^ニ年^ハ便^ニ龍宮^ニ城^ニ之^ニ一^ニ晝^ニ夜^ニ也然^レ以^テ三^ニ百^ニ八^ニ十^ニ年^ハ為^ス定^ニ命^ト也
總^ニ人^ノ間^ノ世^ノ誦^ス經^ヲ音^ノ聲^ヲ具^ニ聞^ク龍宮^ニ城^ニ也更^ニ有^リ五^ニ裏^ノ山^ニ其^ノ處^ニ有^リ壹^ニ萬^ニ
五^ニ千^ニ七^ニ百^ニ二^ニ十^ニ堂^{ナリ}其^ノ中^ニ金^ノ堂^ハ八^ニ百^ニ銀^ノ堂^ハ鐵^ノ堂^ハ各^ノ五^ニ千^ニ也持^ツ五^ニ戒^ニ三^ニ歸^ニ等^ヲ
入^リ或^モ誦^ス經^ヲ者^ノ納^リ在^ス金^ノ堂^ニ矣銀^ノ堂^ハ鐵^ノ堂^ハ亦^モ各^ノ隨^フ其^ノ分^ニ爾^ヲ焉龍^ノ帝^ノ王^ノ
坐^シ而^モ罪^ノ之^ヲ輕^ニ重^ニ善^ノ之^ヲ可^シ否^シ等^ヲ詳^ニ批^シ註^ス也我^ノ等^ハ者^ハ本^ニ伊^ノ弉^ノ諾^ノ伊^ノ弉^ノ冊^ノ尊^ノ
第^ニ四^ニ神^ノ生^ル素^ノ蓋^ノ鳥^ノ尊^ノ日^ノ本^ニ為^ス祇^ノ園^ニ內^ニ神^ノ為^ス有^リ情^ノ利^ノ益^ノ化^ス現^ス明^ノ神^ト
者^ノ也詔^シ畢^ス

贊記

秦^ノ始皇^ノ帝^ハ好^ミ神^ノ仙^ノ術^ヲ竝^ニ童^ノ男^ノ女^ノ等^ノ事^ヲ實^ニ詳^ニ于^ニ史^ニ記^ニ始^ニ皇^ノ本^ノ紀^ニ蓬
萊^ノ者^ハ列^ニ子^ノ曰^ク梯^ノ壚^ノ之^ニ中^ニ有^リ五^ニ山^ニ焉一^ニ曰^ク岱^ノ與^ト二^ニ曰^ク員^ノ嶠^ト三^ニ曰^ク方^ノ壺^ト四^ニ曰^ク瀛^ノ洲^ト五^ニ曰^ク蓬^ノ萊^ト其^ノ山^ノ高^サ下^ニ周^ニ旋^ニ三^ニ萬^ニ里^ニ其^ノ頂^ノ平
處^ニ九^ニ千^ニ里^ニ山^ノ中^ニ間^ニ相^ニ去^リ七^ニ萬^ニ里^ニ以^テ為^ス隣^ニ居^ヲ焉其^ノ上^ニ臺^ノ觀^ニ皆^ニ金^ノ玉^ノ
禽^ノ獸^ノ皆^ニ純^ニ編^ニ珠^ノ玕^ノ之^ニ樹^ニ皆^ニ叢^ニ生^ニ花^ノ實^ニ皆^ニ有^リ滋^ニ味^ニ食^ハ之^ヲ皆^ニ不^レ老^ニ不^レ
死^ニ所^ノ居^ノ之^ニ人^ノ皆^ニ佛^ノ聖^ノ之^ニ一^ニ日^ニ一^ニ夕^ニ飛^リ相^ニ往^リ來^ニ者^ノ不^レ可^シ數^ス焉而^モ五
山^ノ之^ニ根^ノ無^レ所^ニ連^ス著^ニ常^ニ隨^フ潮^ノ波^ニ上^ニ下^ニ往^リ還^ス不^レ得^ル暫^ニ時^ニ焉

右^ノ古^ノ記^ハ有^リ寫^ノ帖^ニ所^ニ謂^フ鳥^ノ魯^ノ魚^ノ有^リ錯^ニ誤^ニ故^ニ痛^ニ懷^ニ病^ニ之^ニレ^ヲ且^ニ外^ニ雖^モ
閱^ス間^ニ更^ニ無^レ由^ニ詳^ニ校^ス今^ニ雖^モ不^レ委^ニ悉^ニ唯^ニ為^ス口^ノ碑^ニ記^ト寫^ス之^ニ云^フ
云^フ時^ニ安^ニ政^ニ六^ニ未^ニ孟^ニ春^ニ應^ニ需^ニ書^ヲ焉延^ニ利^ニ峯^ニ水^ノ子^ノ叟^ト

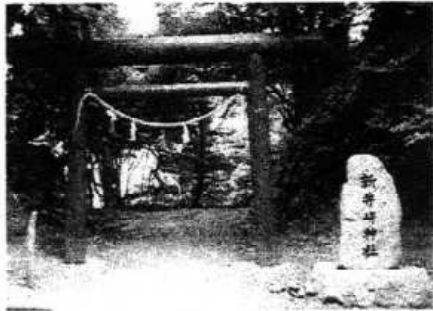
新大明神口碑記

原^ニぬ^ルに夫^ノれ丹^ノ之後州與佐^ノの郡澄^ノの江^ノの里^ニ新大明神^ハは震旦^ノ秦^ノの始皇^ノ帝^ノの
奉^ニ侍^スの童^ノ男^ノ童^ノ女^ノなり實^ニに日本^ノ人皇第七代^ニ孝靈^ノ天皇^ノの御宇^ニに當^レれり

蓋始皇帝好んで長生不死の仙術を学ぶ。その方や朝には金丹石髓を服し暮には玉漿酒瓊醬を飲む。以て真人不死の神薬を求欲す。九莖の芝艸九節の菖蒲は不老延齡の菓餌なり。故に童男寡女に救命して言く。城丹後奥郡澄の江の里は龍宮城と同所にして異名なり。汝等去りて此の真人の霊薬を尋ね来る可し。儼然らば則ち歸る勿れと。童男寡女勅を承つて得得と而て海に航来て澄の江に着岸す。時に澄の江の村長怪しんで且つ問いて云く。答に上件の事を以てす。間項。咸陽宮の事を談じて曰く。先づ始皇帝都の都なり。周廻壹万八千三百八十里也。其の中。縦横十八里。劃て是を内裡と為す。彼咸陽宮は政道を行ふ殿也。東西九町。南北五町。高さ三十六丈の大床有り。其の下五丈の旗幟立雖も尚不及也。金を以て日を作り銀を以て月作り。その上に瑠璃の瓦を以て葺き。七寶を以て鏤め以て熒然たり。其の地形や瑠璃の砂五十万斛真珠砂三十万斛を鋪て高く之を築き。四方は鐵を以て地を百丈に築き鴻鴈北路より来る時飛行自在の障り有り。故に牖を開きて之を通ず。之を鳳門と謂う。巨細省署するのみ。祇此の里に来て我心猶豫を懷く竟に未だ決せず。所以に如何となれば今、此の澄の江の龍宮とは各別なり。真人の霊薬面り現在前す。雖も実に見る者の旌絲似も幽に正に知る者の麟角よりも罕なり。矧求めて獲難おや。嗚呼咸陽宮を不覩唯。目中に隱隱たり悲しい哉。本国に不歸。常に心裡に恍惚たるのみ。夢に非ずんば未だ咸陽宮に到るに由なし。幻に非ずんば始皇帝を拝することを得ず。紅淚千行鬢髪を濕し丹誠萬緒綫絲を亂る。斯において去所を不知らず。欸然として蓬萊を見る。是即ち童男寡女踰現之處なり。而して後屏風疊岩二ツ岩等に於て申申如たり。天天如たり。時に燕居せること有り。乃ち村長又問いて云く。彼の龍宮の如き鮮いかな。知者の末世の證據と為さんと欲す。願くは委説することを得るや。答えて云く。高山漠漠として深谷迢遞たり。玉樹瑞草嘩嘩と常に榮ふ。堂宇を環眈するに皆明璣翠璫を綴る。楹櫺煥燿金鈿を布くが若し。異香氤鬱たり。其の庭戸に滿つ精華絕妙世に有る所に非ず。天氣和適偏に春熙の如し。彼の咸陽宮に比せば豈天壤のみならん哉。我等龍宮城に侍ること將に一時許りと謂えり。此の国の日月已に七八年を過ぎたり。昔菩薩聖衆記に云く龍宮城の體為く。東方に大河有

り。其の廣きこと三百六十丈餘。其の深きこと五百八十丈餘なり。波浪激翻するは三十丈餘。其の河邊に樹有り。高さ二千七百餘丈其の樹東に指さす枝に花開く時は春と為り。又。南の枝に花開く時は夏となり。西に向ふ枝に葩發く時は秋と為る。又。北枝に葩發く時は冬となり。此の樹や之を載ること不能はず。若し強いて斧鉞を觸するときは則ち紅色の水木中より流迸恰も大瀧水の如くにして生類皆迷惑す。法華經を讀誦するときは則ち彼の紅色水忽ち止む。又。娑婆世界の七十八年は優ち龍宮城の一晝夜なり。然して三百八十年を以て定命と為すなり。總て人間世諸經の音聲具に龍宮城に聞ゆるなり。要に五襄山有り。其の處に壹萬五千七百二十堂有り。其の中金堂八百銀堂鐵堂各々五千なり。五戒三歸等を持つ人と或は誦經は金堂に納在す。銀堂鐵堂亦各々其の分に隨つて爾り。龍帝王坐して罪之輕重善の可否を詳に批註す。我等は本伊婁諾伊婁冉尊第四神生素盞烏尊日本に祇園内神と為り有情利益の為に明神と化現するものなり。詔畢す。

賢記
秦の始皇 神仙の術を好み並びに童男女等の事 実に史記始皇本紀に詳かなり。蓬萊とは列子が曰く。歸墟の中に五山有り。一に曰く岱輿。二に曰く員嶠。三に曰く方壺。四に瀛州。五に曰く蓬萊という。其の山の高下周旋三萬里。其の頂きの平處九千里。山の中間相去ること七萬里。以て隣居を為す。其の上臺を觀るに皆金玉なり。禽獸皆な純縞珠珣の樹皆な叢生す。花實皆滋味有り。之を食へば皆不老不死。所居の人皆佛聖の一日・一夕飛びて相往來する者數不可す。而して五山の根連著する所無し。常に潮波に隨つて上下往還。暫くも峙つことを得ず。古記寫帖有りて、所謂鳥と焉。魯と魚の錯誤有り。故に痛懷之を病む。且つ外に問問閱雖も更に詳校するに由無し。今委悉不雖も唯口碑記の為に之を寫すと云云。
時安政六未孟春
需に応じ書す 延利峯水子叟 印



信子節と新井崎神社

丹後徐福会

会長 石倉昭重

2002年6月中国北京市で徐福国際検討会が開催された。私も幸いに参加することができ、発言を許されて我がムラに伝わる徐福伝説の中で、唯一の文献である『新大明神口碑記』について若干考えていることを発表した。

検討会には、東アジアの多くの研究者が集まったが、この論文は、池上正治先生のご苦勞によってまとめられ、『特集－徐福アジア 2000年の青い鳥』（アジア遊学52）が勉誠出版から刊行された。

今回の私の訪中には、この検討会の他にもう一つの目的があった。それは、以前から「滄州市児童教育基金」を創設して、千童鎮の恵まれない子供たちの援助をしてきた石川幸子女史を応援する為に、丹後徐福会会員を中心に善意の寄付を募り、それを懐中にしていたのである。そうして、これは私だけではなく、大阪徐福友好塾主宰の鳥居貞義先生、富士山徐福館館長土橋寿先生等も同様の目的を持っての訪中であつた。

『新大明神口碑記』の巻頭に「新大明神は始皇帝奉侍の童男童女也」という条りがある。私たちの先祖は、岬の裏山・神籠山が噴火の際の火山弾の角礫岩を磐座とし、長徳四年（998）神社創建の時、童男女一対の木像を彫り、これをご神体として祀つたのである。

『史記』は「徐福はついに始皇帝のもとに帰らなかった」と記しているが、童男女もまた二度と故郷の土を踏むことはなかった。それは、遠く漢の時代から60年に一度催される「信子節」から知ることが出来る。信子節は、東海に船出した子供達の帰りを待ちわびる祭りである。その有様を千童鎮の博物館で十分に伺い知ることが出来たのであるが、私はそれよりも玄関に掲げてある大きな東渡の絵に、異様の感銘を受けたのであつた。

それは、壮途を祝うものではなく、惜別の絵、涙の別れの絵であつた。船に乗り込む子供達を親兄弟や多くのムラの人達が寂しそうに、悲しそうに見守っている絵であつた。

私は思う。でもその子供達は、苦勞の末に丹後新井崎に着いた。そして、現地先住民の中に溶け込んで私達の先祖となった。私達の先祖は、それを忘れることはなかった。一千二百年の後、神社を建て祭神として祀つたのである。私は、千童鎮を訪れて、信子祭を知り、そして、あの絵を見てわがムラに伝わる徐福伝説と重ね合わせて、己の体の中に千童鎮の血が流れていることを確信したのであつた。

私は今、千童鎮の人々に告げたい。「貴地から渡海した童男女は丹後新井崎に着き、神として祀られています。神社の入り口には、中国徐福会会長・李連慶先生の揮毫による「新井崎神社」の刻石標柱が建てられました。私達はムラが続く限り、この社を護って行きます。どうぞご安心ください」と。

古代の音

陶埴の来た道

音は、人間社会にとって欠くことのできないもの
もつる。人の話す言葉はもちろんのこと音楽は人の
心をなごませ、人々の生活を豊かなものにしてきた。

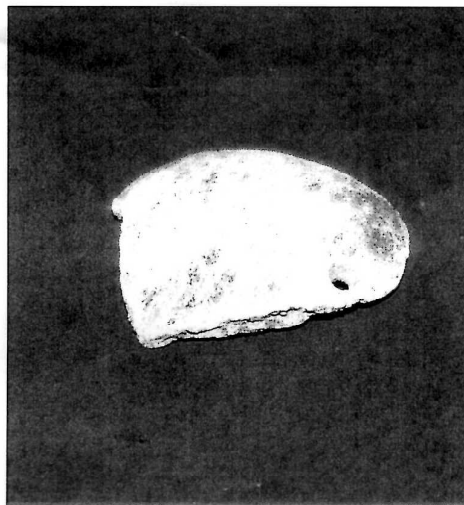
そして、古代の社会にも音をかなでる楽器が存在
していた。

縄文時代には石笛・土笛が発見されている。

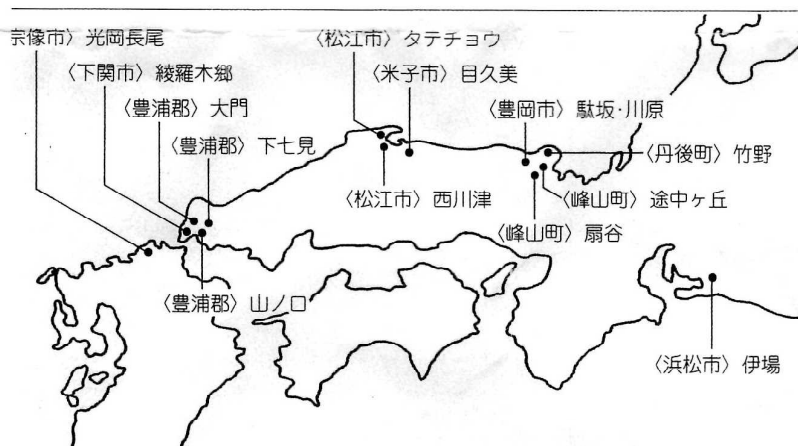
弥生時代にはいり、中国を起源とする楽器が日本
に伝わる。木琴や陶埴がそれである。陶埴（土笛）
とは卵形をした土製素焼きの笛で、古代の中国の書
物に書かれた『埴』に形状が似ていることから、こ
の名が付けられた。

日本の陶埴は、現在日本海側を中心に13遺跡 58
年（平成5年現在）が発見されている。

昭和61年 丹後町の竹野遺跡からもこの陶埴が発
見された。



陶 埴（丹後町竹野）



陶埴の出土した遺跡



陶 埴（峰山町途中ヶ丘遺跡・扇谷遺跡）

浦嶋神社 (宇良神社)

鎮座地 京都府与謝郡伊根町本庄

祭神 浦嶋子 (浦嶋太郎)

相殿神 月讀命 祓戸大神

浦嶋神社は延喜式神名帳所載によると『宇良神社』と記されている。創祀年代は淳和天皇の天長二年(八二五) 浦嶋子を筒川大明神として祀る。

浦嶋子は日下部首等の祖先に当り、日下部については『新撰姓氏録』の和泉皇別の条に「日下部、日下部宿禰同祖、彦坐命之後也」とみえる。彦坐命は開化天皇(紀元前一五七〜九八)の子、従って日下部首は、開化天皇の後裔氏族である。その大祖は月讀命の子孫で当地の領主である。

浦嶋子は人皇二十一代雄略天皇の御宇二十二年(四七八)七月七日に美婦に誘われ常世の国に行き、その後三百有余年を経て五十三代淳和天皇の天長二年(八二五)に帰って来た。常世の国に住んでいた年数は三百四十七年間で淳和天皇はこの話を聞いて浦嶋子を筒川大明神と名付け小野篁を勅使として、勅宣をのべたうえ小野篁は勅命をうけたまわって宮殿を御造営し、ここに筒川大明神が鎮座されたのである。

この神社に伝わる浦嶋物語は起源が最も古く、すでに八世紀にできた丹後風土記・日本書紀・万葉集などに記載されている。このような浦嶋子の伝説は、その後長く伝えられ『本朝神仙伝』や『扶桑略記』の雄略天皇紀等、平安時代の文獻にも収められている。

又、この神社に伝わるものとして『浦嶋子口伝記』『讀浦嶋子伝記』があり『讀浦嶋子伝記』の巻首には「承平二年(九三二) 壬辰四月廿二日甲戌、於勘解由曹局注之、坂上家高明耳」、伝記と漢詞との間に「干時延喜二十年庚辰八月朔日也」、巻末に、「永仁二年甲午八月廿四日、於丹州筒河庄福田村宝蓮寺如法道場、依難背芳命、不顧筆跡狼藉、馳紫毫了」とある。

これは、延喜二十年(九二〇)の制作で、承平二年(九三二)に

注を付したこと、さらに、永仁二年(一二九四)に浦嶋子物語の発祥の地丹後国筒河庄の福田村にある宝蓮寺如法道場で書写した本が底本に用いられていることが判る。この永仁二年書写本は現存している。これらの古伝説は近世のお伽草紙の浦嶋太郎の物語とは様相を異にしている。

又、古代より浦嶋神社に対しての崇敬の念は厚く誠に顕著なものがある。

浦嶋子のおはなし(浦嶋子伝記要約)

雄略天皇二十二年秋七月七日、丹後国、与謝郡筒川庄、水乃江乃里に住む、容姿端麗な水乃江乃浦嶋子は、ひとり船に乗り、海上に浮んで釣りを楽しんでいました。ところが一匹の魚も釣ることができず、三日目には諦めて竿を上げようとしたところ、一匹の五色の大亀を釣りあげました。嶋子は恐る恐る船の中に入れ眺めているうちに、やがて居眠りをしてしまいました。しばらくして目を覚ますと亀はたいそう美しい乙女の姿となつて、嶋子を常世の国へ誘い、二人して船にて常世の国へ行きました。常世の国の宮殿は今迄目にしたこともなく、人より聞いたこともなく、とてもとてもきらびやかであり嶋子は乙女に、『夢を見ているのでしょうか?』と尋ねました。すると乙女は『ここは常世の国でございます。君と共に住むところでございます』と知らされました。その後二人は手を取り合いい、乙女の住むという立派な屋敷に案内をされました。乙女の屋敷の門の前で乙女は嶋子を待たせ、両親に夫婦の契の許しを得るため門の中に入って行きました。その待っている嶋子の前には、七人の子供達と、八人の子供達が入れかわり出て来て、『亀姫(神女)の夫になられる方でございます』と知らされ、さんざんいたづらをされました。そこで亀姫(神女)の名前を知り、とても不安な気持ちで待たされました。その後神女と嶋子は一緒になることを許され、夫婦となつて毎日楽しい日々を送りました。ところが三年経ったある日のこと嶋子に故郷への思いがあることを知った神女は、嶋子に美しい衣を着せ、神女の分御霊の入った玉櫛笥(玉手箱)を与えて

『再会を期するならば、けっしてこの玉櫛笥の蓋を開けてはなりません、お約束をしてください』と告げて、二人は約束の後嶋子は常世の浜から船に乗りお共の人達の手によって送り帰されて来ました。水乃江乃里に帰った嶋子は、故里の人跡は絶えて、古い松、古い杉の聳える変わり果てた有様を見て驚き悲しみました。やがて、筒川の川の辺で洗濯をする老婆に出合い『三百年もの昔、嶋子というお人が、海に釣りに出かけられたまゝ、帰ってこられなかったそうだ』という言い伝えがあることを聞かされました。嶋子は常世の国の生活が、三百年にもあたることをさととり、その後十日間ほど生きていました。その間、日毎に神女を思う心がつのり、玉櫛笥の蓋をあけてはならないと言う約束を忘れて、その蓋を開けてしまいました。すると中から紫のけむりが蘭の香りをただよわせて立ち登り、常世の国の方へたなびき、そのむらさきのけむりを追っていくうちに、白髪の老翁となり亡くなりました。

御神徳 縁結神、長寿神、魚業神、航海神、農業神、

牛馬神、養蚕神として深く信仰されている。

御祭日 元旦祭 一月一日

節分祭 二月節分の日

宵宮 三月十六日日の入り刻(花納め行事)

祈年祭 三月十七日午前九時

延年祭 三月十七日午前十時

例大祭 八月六日(宵宮) 七日(例大祭)

新嘗祭 十二月七日

月次祭 毎月 七日・十七日

御宝物

続浦嶋子伝記 一巻

浦嶋子口伝記 一巻

浦嶋子之縁起 一巻

新選浦嶋子伝 一巻

浦嶋神絵巻 一巻(重要文化財)

浦嶋神絵巻 掛幅形式 一幅

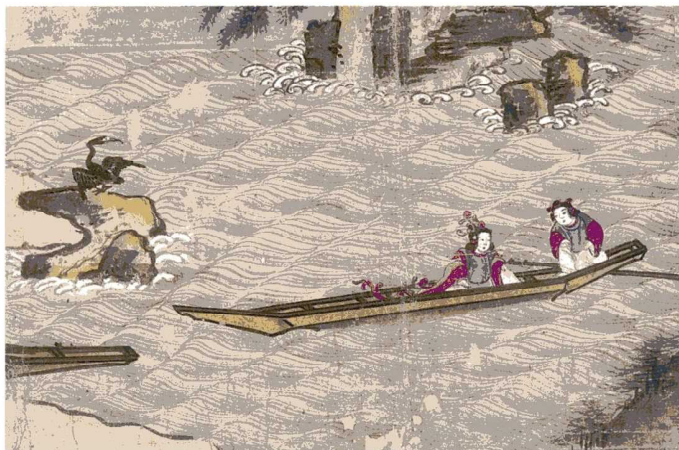
玉手箱 (玉櫛笥) 二合



玉手箱(亀甲文櫛笥)

一合 (室町時代)

長40榧、巾26榧、高21榧
角々に丸みをつけて蓋の上もこうもり高である。黒漆研出梨子地に蒔絵を施し当時常用櫛笥として多大の感興を惹くものである。



浦嶋明神縁起

十四世紀前半(重要文化財)

この縁起は浦嶋太郎の住んでいた水乃江里から浦嶋太郎が蓬萊山の国に至る迄と帰って来てからの出来事等を細かく古い書物をもとに画かれた日本最古と云われる浦嶋を物語る絵巻である。

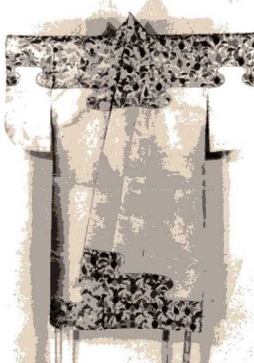
能面 一八面
その他数多の御宝物が残されている。

大徳利 一對(鎌倉時代)
大徳鉢 一個
神御衣 一領
(白練緯地桐桜土筆肩裾文様繡小袖) 一領
(重要文化財)

シロネリタテ ジキリサクラ ツクシカタスソモンヨウマイ コソデ
白練緯地桐桜土筆肩裾文様繡小袖

乙姫小袖(桃山時代重要文化財)

肩と裾だけに文様を置いた室町時代中期から桃山時代にかけての特色ある小袖で、こうした肩と裾と云う文様の構成からこの種の小袖は肩裾とよばれて来た。文様は桐唐草と春の花の文様で神御衣として神社に奉納されたものである。



広がる不老不死の世界

●異空間の世界

丹後半島にのこされている説話といえ、まず思いつくのが浦島の話ではなからうか。いわゆる『浦島太郎』の話であり、昔話のひとつとして有名である。最近、ある新聞社が子どもたちを対象として行ったなじみのある昔話についてのアンケート調査でも、『シンデレラ姫』などとともに上位にランキングされている。

こうした昔話の『浦島太郎』のもとになっているのは、中世の末期から近世の初頭にかけて成立した御伽草子のひとつである『浦島太郎』であるが、さらにそのルーツをたどっていくと古代の浦嶋子伝承にまでさかのぼることになる。この浦嶋子伝承は、『日本書紀』や『万葉集』・『丹後国風土記』にみることができるといっても、『日本書紀』にはごく簡単な記述しかみられず、したがって、内容的な面からいうと、『万葉集』と『丹後国風土記』ということになる。

しかし、いずれにしても伝承の舞台は、丹後半島と考えられる。浦嶋子伝承については、のちにさらにとりあげるが、伝承の構成要素として、不老不死を説く神仙思想と海人による伝承という二つの要素を指摘することができる。そして、この二つの要素は、じつは、浦嶋子伝承のみではなく、丹後半島にみられるいくつかの代表的な説話に、あるいは大きく、あるいは微妙に関わりをもっていることに気がつく。

たとえば、伊根町の海岸べりに鎮座している新井崎神社の祭神はというと、徐福である。秦^{しん}の始皇帝^{しこうてい}の命をうけて不老不死の妙薬を求めて東方海上に向かったとされる伝説上の男である。この徐福伝説は和歌山県の熊野をはじめとして、現在、各地にみることができ、丹後半島にも足跡を残している。新井崎神社の付近には、徐福が上陸したという伝承をもつ磯もある。



新井崎神社 不老不死の仙薬を求めてやってきたといわれる徐福を祭っている。



新井崎・ハコ岩 徐福が上陸した場所とされ、近くには新井崎神社がある。

この徐福伝説には、いうまでもなく神仙思想の影響が色濃く反映しているし、また、伝説の背景に海人集団を考えることもできるであろう。

神仙思想という点では、「熊野」という地名もものがせない。徐福伝説で有名な和歌山の熊野以外にも古代の地名や神社名としていくつかの熊野を確認することができ、丹後半島にもその一つがみられる。熊野という地名の由来は、奥まった場所、つまり「隈野」にあるが、それは海からみて奥まった場所ということに他ならない。そして、付近に不思議と神仙思想の要素をもつ説話をみることができる。

さらに、丹後半島にみられる神仙思想を要素とする説話としては、羽衣伝説もあげられる。『丹後国風土記』に見られるこの説話は、現在、日本各地に残されている羽衣伝説のなかでも、『近江国風土記』に載っているものと並んで由緒正しい古代の説話として知られる。地上に降りた天女が万病に効く酒を造るというこの説話は、まさしく神仙思想そのものといえよう。天女という存在自体、わたしたち人間とは異次元の世界の女性であり、あこがれの対象に他ならない。

異次元の存在としては、丹後半島には鬼の説話も残されている。大江山の鬼退治の話であり、源頼光や麻呂子親王がヒーローとして姿をみせている。この鬼と神仙思想とは直接的に結びつくものではないが、人間と異次元の存在という点では天女も鬼も同じであり、何よりも神仙思想も鬼も中国で成立した道教の重要な構成要素であるということは興味深い。

このように、丹後半島には、いっぷう変わった魅力的な説話がいくつもみられ、いわば異空間のようなムードをかもし出しているが、その背景には、やはり海人集団の影が見え隠れしているように思われる。このことを浦嶋子伝承を例にとってもう少し探求してみたいと思う。

神仙思想の伝来

● 神仙思想とは何か

道教は中国大陸で生まれた宗教であるが、さまざまな民間信仰を基盤として自然に発生したものに老荘思想などがとりいれられ整備されていったので、仏教やキリスト教などの他の宗教と違って開祖はいないし、また体系化された教理・教義といったものがない。むしろ中国で民族の間に自然発生的に生まれてきた原始信仰が集大成された宗教が、道教であるといえる。これらの民間信仰の中で、道教と深い関係を持ったのが、陰陽五行説や道家、讖緯説、神仙思想などである。

このうち神仙思想は、中国固有の古くからある民間信仰である。漢民族は現実主義の傾向の強い民族で、永遠に失われることのない富貴と寿命を得ようとした。この神仙思想は紀元前三〜四世紀の戦国時代に形成され、とくに山東半島の北部沿岸地方において、呪術や方術を使う方士が不老長寿の養生法、すなわち長生術を説くようになり、色々な民間の呪術や信仰を吸収して各地に広がった。この長生術を体得したものが神仙であり、やがて遙か東方海上に存在すると言われる蓬萊・方丈・瀛州の三神山を始め、各地の深山幽谷に住むと信じられるようにな



新井崎神社 徐福はこの地に渡来して住みつき、医薬・天文・占い、漁業や農耕の技術を伝え、死後産土神として新井崎神社に祀られたという伝承が残っている。



「徐福採薬図」 方士徐福は秦の始皇帝の命により、不老不死の仙薬を求めて東海に船出したが、ついに戻らなかったと『史記』は記す。金立神社蔵。写真提供、佐賀県立博物館。



徐福上陸伝承地 徐福が渡来したという伝承は各地に見られるが、そのひとつ。



った。さらにその後神仙は不老長寿だけでなく、あらゆることをおこなえる全能的人格に変化していくのである。

戦国諸侯もこの長生術を信じたが、とくに戦国時代を統一した秦の始皇帝は不老不死の仙薬を求め、徐福という方士に命じて蓬萊山に仙薬を取りに行かせている。徐福は数千人の少年少女と多数の船で蓬萊山を目指したが、とうとう帰ることはなかった。しかし現在日本各地に徐福が渡来した伝説が残っている。この徐福伝説は、和歌山県を始め、九州から青森県まで分布するが、丹後半島にも伊根町の新井崎神社付近に徐福上陸の遺称地がある。

このように神仙思想は道教思想の中心的性格を帯びてくるが、教団らしいものが形成されるのは後漢時代で、張角が病氣平癒の呪術で広めた「太平道」である。しかしこの教団はやがて「黄巾の乱」という反乱を起こし壊滅してしまう。その後三国時代に張陵が始めた「五斗米道」などの教団道教が成立する。太平道も五斗米道も民間の下層民の支持を受けたが、しかしそれは病氣平癒などの現世利己的の性格が強かった。不老長寿を理論的に確立したのが葛洪の『抱朴子』であり、それをもとにして広まったのが神仙道であった。

こうして民間信仰がとにかく一つの教理を持って宗教教団の組織を伴ったものを成立道教、または教団道教と呼ぶ。しかし日本に伝来したのはこの成立道教ではなく、寺院に当たる道観や僧侶に当たる道士を伴わない民衆道教であったといわれている。そのような教団組織が伝来する契機はなく、むしろ日本に渡来する渡来人によって、道教の中でもっとも素朴な思想である「不老長生」を願う神仙思想を受容したものと思われる。

●神仙思想の伝来

・日本に神仙思想がいつ、どのような経路で伝わったかは明らかではない。奈良県葛城郡新山古墳などの古墳から出土する銅鏡に「東王父」「西王母」などの神仙らしい姿や道教的な吉祥句なども見られるが、それらを神仙と理解していたとは思われない。また『日本書紀』雄略天



飛鳥池遺跡出土「天皇」号木簡 一九九八年調査された飛鳥池遺跡から「天皇」の語を記した木簡が発見され、天武朝にはすでに「天皇」という語が使用されていたことが明らかになった。奈良文化財研究所許可済み。

皇二二年秋七月条には、神仙思想の影響を受けた「浦嶋子伝承」が現れるが、これをもって直ちに五世紀後半の雄略朝の頃に神仙思想が伝来していたと決めるわけにはいかない。しかし、雄略紀はそれ以前の『日本書紀』の記事と異なり、物語要素が急激に増加するという特徴が見られる。おそらくそれは大陸からの渡来人の増加が影響していると考えられている。

推古天皇一〇年（六〇二）には、百濟僧観勒くわんろくが日本に来て「曆本及び天文地理の書、併びに通甲方術の書を貢ぐ」とあって、初めて道教に関係のある書物が伝来したことが知られる。百濟は古くから中国の南朝との関係があったから、これらの道教の神仙に関係する書物は中国の江南地域のものも含まれていたと想像される。

『日本書紀』には、「浦嶋子伝承」の他にも神仙思想の影響を受けているところがあり、たとえば有名な聖徳太子の片岡山遊行説話などは、道教の「尸解仙しかいせん」であろう。また最近奈良県の飛鳥池遺跡から「天皇」号木簡が出土して話題となっているが、「天皇」という称号も、道教の最高神の一人とされる天皇大帝に由来するといわれている。特に天武天皇の諡は「天淳中原瀛真人あまのぬな はら おきのまひと」であり、瀛は神仙境の蓬萊・方丈・瀛州の三神山のうちの瀛州山を指し、真人とは仙人を指す道教用語である。このように道教がいつ伝来したかは不明であるが、少なくとも七世紀後半には、天武天皇を始め支配者層にはかなり広まっていたと考えられる。

しかし日本ではこの道教は、教団として成立することはなかった。むしろ『日本書紀』皇極天皇四年の常世神信仰事件や、『日本霊異記』の漢神信仰などを見ると、仏教勢力と対立して弾圧が加えられていることが知られる。すなわち日本では道教は、不老長寿をめざす神仙思想として愛好され、受容されたのであろう。またその受容も日本的であった。浦嶋子伝承におい

て、浦嶋子は仙人にはなれなかった。仙人であったのは「亀比売」であった。また風土記に見られる羽衣説話の天女や『万葉集』の松浦の仙女も女性である。特に日本では仙人は中国と異なり女性であることが多い。ここに日本的な神仙思想が存在するのである。そして在来信仰の神祇信仰に、いつしか結びついて今に至るのである。「浦嶋子伝承」は、大陸の神仙思想の影響を受けながらも、きわめて日本的な内容の伝承であるといえるのである。それが現在まで日本人が愛好する代表的な物語になった理由ではなからうか。

コラム・熊野という地名

●古代の熊野

熊野というと、現在、紀伊半島の熊野三山とその信仰を思いうかべるのが普通であろう。しかし、古代地名としての熊野という点に注目すると、紀伊半島のほかにもいくつかの「熊野」があることに気がつく。たとえば、島根県八束郡の八雲村に鎮座する熊野神社は、天平五年（七三三）に成立した『出雲国風土記』に「熊野大社」として名がみられる古社である。

また、『伊予国風土記』逸文には、熊野岑の記載がみられるし、『和名類聚抄』をひらくと、但馬国二方郡に熊野郷という地名を確認することができる。さらに、一〇世紀の初めにまとめられた『延喜式』の神名帳には、越中国婦負郡、近江国高島郡、丹後国熊野郡にそれぞれ熊野神社がみられる。

これらの熊野神社のうち、丹後国熊野郡に鎮座するものに注目すると、この神は『日本三代実録』の貞観一〇年（八六八）九月二一

久美浜湾



日条にもみることができ、このとき正六位上から従五位下へと昇叙されている。熊野郡にあたる地域は、丹後半島の西部を占めており、南は山となっていて、中央部の沖積地がわずかな平野になっている。山間部は、高さが六〇メートルほどの山地を形成しており、佐濃谷川・川上谷川・久美谷川といった河川が久美浜湾へと注ぎ込んでいる。これらの三つの河川にそって、佐濃谷・川上谷・久美谷の沖積平野が形づくられているのである。そして、沿岸部は久美浜湾となっており、砂丘やリアス式海岸が北へむかって続いている。

丹後国の熊野郡の地理的環境をのべてみたが、ここにみられる特徴は、じつは丹後国の熊野郡だけにみられるものではなく、他の熊野についてもあてはまる点が少なくない。

●熊野のイメージ

それでは、熊野という名の地名や神社がみられる地域にはどのような特徴がみられるの



であろうかという、まず、近くに海があり、さらに海岸線はリアス式など複雑な様相を示しており、そこから平野となっていて、そして、その背後には山がある、といった点がほぼ共通項としてあげられるように思われる。また、常世国に関する伝承をはじめとして神仙思想に関連する伝承が付近にみられることも類似している。丹後国の場合についていうならば、浦嶋子伝承や羽衣伝承が残されている。

もともと熊野という名称は固有名詞ではなく、普通名詞と考えられる。意味的に熊野をとらえるならば、「隈」プラス「野」と解釈するのが一番ふさわしいと思われる。つまり、奥まった所の野というのが熊野ということになる。それでは、いったい、何に対して奥まっているのかというと、それは、海に対して奥まっているということに他ならない。そして、それは言葉を変えるならば、海のかなたにあるとされる常世国からみて奥ということになる。紀伊の熊野に隣接する伊勢が「神風伊勢国、常世の浪寄する国」と『伊勢国風土記』の逸文に記されているのは、まさしく

そういった認識を端的にあらわしているといえよう。したがって、熊野側、すなわち現実世界からみるならば、熊野やその周辺地域、特に海岸部は常世国への入り口ということになる。

このように、熊野と常世国とが結びついたのは、やはり、熊野にみられる地形の複雑さが大きな要因と考えられる。この点については、紀伊の熊野を対象として、紀伊半島のもつリアス式などの変化に富む海岸、そしてそこにみられる瀑布・洞窟・温泉や山間部にくりひろげられる景観の複雑さが桃源郷としての常世国をイメージさせる、という指摘がしばしばみられるが、このことは紀伊の熊野のみにあてはまることではなく、他の地域の熊野についてもおおむねいえることである。たとえば、出雲の熊野を例にすると、近接している島根半島は、半島全体がリアス式海岸ではなく、半島の中央部から西部にかけては断崖となつている。つまり、半島の東部のみがリアス式海岸を形成しているわけであり、熊野は、まさにこの東部に近接しているのである。こうしたことから、熊野と地形の複



雑さの関係がいかに密接であるかということが理解できるであろう。

これらのことから、熊野という名称（地

名・神社名）は、常世国をはじめとする神仙思想の影響によって生まれたものということができよう。

コラム・丹後の羽衣伝説

●白鳥処女型説話

天女が白鳥に姿を変えて地上に降りてきて人間と交渉を持つというタイプの伝承は、羽衣説話とか天人女房とかといわれ、日本の各地に分布がみられる。その数は現在、一三〇以上に及ぶといわれており、昔話の中においても重要な位置を占めている。

さらに、目をひろげると、このタイプの話は日本のみならず、世界的にも類型をみることで、一般的には白鳥処女型説話という名でよばれている。このように、世界的にも普遍性をもっている羽衣説話であるが、いたい、日本にはいつのころからみることができるのであるか。これに答えてくれるのが、奈良時代に国ごとにまとめられた『風土記』

である。そのなかでも『近江国風土記』の逸文として残されているものは、まとまった形でみることのできる羽衣説話の最古の例とされている。

『近江国風土記』にみられる羽衣説話の内容はというと、天女が八人、白鳥となって与胡郷の伊香小江に降りてくるところから始まる。これをみた伊香刀美という青年が白犬を使って一番若い天女の羽衣を盗み、彼女と夫婦になるのであるが、その天女は最後にはとうとう羽衣を奪い返して天へ帰っていつてしまう、というストーリーである。

この『近江国風土記』の伝承とは異なった展開をみせるが、やはり羽衣説話のひとつといつてよいものが『丹後国風土記』の逸文に



奈具神社 『丹後国風土記』の逸文にみられる羽衣伝承に由来する古社である。

もみることができる。

●丹後の羽衣説話

『丹後国風土記』の羽衣説話の舞台は、丹波郡の比治里にある真名井と名づけられた清泉である。ここに天女が八人降りてきてきて水浴したというのである。これを目にした老夫婦が一人の天女の羽衣を奪ってしまい、自分たちの娘になることを強要する。その後、老夫婦とともに暮らすことになった天女は、万病に効く酒をつくり、そのことによって老夫婦を豊かにさせる。すると、老夫婦はもう娘は不要であるといって天女を追い出してしまふのである。天女は、怒りにふるえ各地を放浪し、最後に竹野郡船木里の奈具村にきて、「此处にして、我が心なぐしく成りぬ」といって、ここに留まった、というのである。そして、これが竹野郡の奈具社に鎮座している豊宇賀能売命であるとしている。

丹後の羽衣説話は、このように奈具社の名称由来としてみられるわけであるが、天女が式内社である奈具社の祭神になっている、という点もみのがせない。豊宇賀能売命は穀物

神とされており、増殖という点などから女神であることにはそれなりの必然性がみられる。

また、羽衣説話は、道教の中核的思想である神仙思想の影響を強くうけている。それは、登場する天女という存在を考えれば一目瞭然であるが、『丹後国風土記』の場合、さらに、天女がつくりだす酒にもまた、神仙思想の要素があらわれている。つまり、その酒は「一杯飲めば、吉く万の病除ゆ」というのであるから、どのような難病にも効果があり、病人は救われることになる。

こうした神仙思想のたまものである天女が、豊宇賀能売命になるというのであるから、これは、神仙思想と神祇思想との習合に他ならないといえよう。

最後に白鳥についてもふれておきたい。

『丹後国風土記』の場合には、「天女八人降り来て水浴みき」とあるだけで、天女が白鳥に変身して降りてきたとは記されていない。しかし、『近江国風土記』には、「天の八女、俱に白鳥と為りて天より降りて、江の南の津に浴みき」とあって、天女が白鳥となって降りてきたことがはっきりとのべられている。こ



乙女神社 天女が降りたと伝わる磯砂山の麓にあり、境内に入ると浦嶋子伝承の乙女（乙姫）を彷彿とさせられる。

うしたことから、丹後の場合も、天女が天から降りてくる際に白鳥に姿を変えてやってきたということが言外に含まれていると考えてさしつかえないであろう。そして、この白鳥もまた、神仙思想と関わりがみられるのである。『豊後国風土記』の総記の条に、白鳥が餅となり、さらに、里芋に変化したと言う伝承が載せられている。そして、その「花と葉

と、冬も栄えき」と記されていて、里芋は冬も枯れないというのである。不思議な里芋であり、その永遠の生命力は、まさに神仙思想の具体例といえるであろう。

これらのことを考え合わせると、羽衣説話の中には、天女をはじめとして、さまざまのところには神仙思想の影響がみえかくれしているといっても過言ではなからう。

コラム・徐福伝説

●謎の人物

いつまでも若く健康でいられる薬があればと思うのは、大方の人の願いであろう。そんな薬を求めて東海の三神山へ向かった人物が徐福である。徐福は徐市じよふくともいい、斉の人といわれるが、なかば伝説上の人物とされている。その徐福が日本へ渡来したというのである。

現在、伊根町に鎮座している新井崎神社の祭神は徐福その人である。さらに、神社の付近の海岸には、徐福が上陸したと伝えられる場所まである。もっとも、徐福が渡来した場所については、伊根町だけでなく日本各地にその伝承がみられる。よく知られているのは紀伊半島の熊野であるが、そのほかにも津軽の小泊、秋田の男鹿半島、八丈島、三河の小坂井、尾張の熱田、安芸の厳島といったように、広範囲にわたって渡来伝承が残されている。

そもそも、徐福が日本へやってきたという

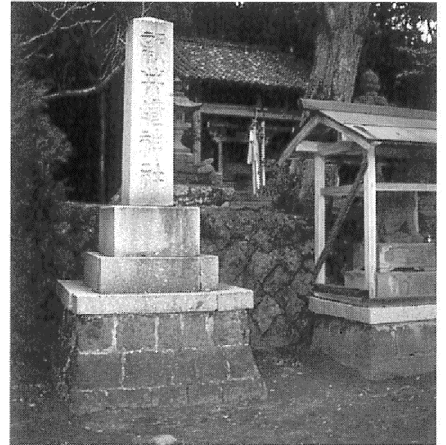
伝承はいつごろからいわれるようになったのかというと、九六〇年頃にまとめられたとされる『義楚六帖』が初めといわれている。それによると、富士山は徐福がめざした三神山のひとつである蓬萊山にほかならず、ここにやってきた徐福はそのままとどまり、さらにその子孫が秦氏になったと記されている。

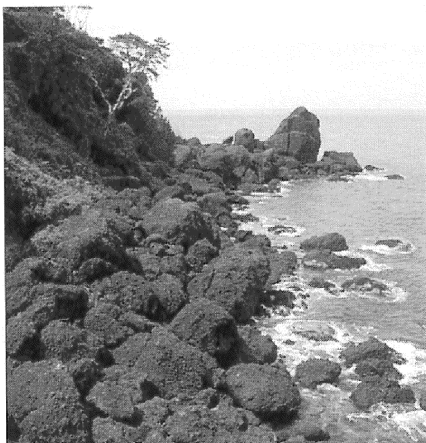
また、紀伊の熊野に渡来したという伝承も古く、無学祖元がつくった漢詩などに詠み込まれている。祖元は、鎌倉幕府の八代執権である北条時宗の招きに応じて一二七九年に来朝し、鎌倉に円覚寺を開いた禅僧として知られる。

●伝説の内容

さて、徐福は、どのようなことをしたのかというと、司馬遷の『史記』に彼のことが記されている。そのなかの秦の始皇本紀二八年の条を見ると、徐福が不老不死にあこがれる皇帝に上書して、海中に蓬萊・方丈・瀛洲の

新井崎神社 祭神の徐福は、不老不死の仙薬を求めて渡来し、付近のハコ岩と名づけられている岩場に上陸したと伝えられる。





三神山があり、そこには仙人が住んでいるので齋戒して童男・童女とともにその地へおもむいて仙人をさがしたい、とのべたことが記されている。そして、これをきいた始皇帝は、徐福に数千人の童男・童女をつけて海に出ることを許し、仙人をさがせたというのである。ちなみに、始皇帝二八年は、紀元前二一九年のこととされている。

『史記』が完成したのは、紀元前九一年といわれているから、徐福の話は、司馬遷が『史記』をまとめるおよそ一〇〇年ほど前のこととなろう。

さらに『史記』の記述を追うと、始皇本紀三五年の条には、徐福がいたずらに浪費ばかりを繰り返し、不老長寿の仙薬を得ることができないでいると記されている。最初は仙人を探す旅であったはずであるが、ここでは求めるものが仙薬にかわってしまったている。

ついで、始皇本紀三七年の条には、徐福のいいわけが載っている。それによると、責任が及ぶのを恐れた徐福は、薬はあるのであるが、大鯨がいるため近づくことができないので優秀な射手を用意してほしい、といってい

る。

これらの記述から、徐福は始皇帝の命をうけて海を渡ったが、九年後に一度もどつてきたことがうかがわれる。『史記』にはこのほかにも、淮南・衡山列伝と封禅書とに徐福のことが記されている。また、『漢書』の郊祀志のなかにも徐福のことが記述されているが、ここでは始皇帝が徐福と韓終らに命じて仙薬を得るために渡海させたが、彼らはそのまま逃げてしまい帰らなかったことになっている。

●徐福の実在性

いままでのことからわかるように徐福には伝説的な要素が強い。しかし、一方では徐福を実在した人物とする考えもみられる。

そのひとつは、徐福の故郷が見つかったというのである。一九八二年に中国江蘇省の連雲港市で地名調査がおこなわれたとき、かつて徐福村とよばれていた徐阜村という地名が確認された。この徐阜村は、前徐阜村と後徐阜村という二つの自然村落によって構成されているが、後徐阜村の方がかつての徐福村にあたることが明らかにされたというのである。

徐福村の存在は、明治時代初期にさかのぼり得る、とされており、徐福の故郷といわれるようになった。このことによって、徐福の実在性は当然のことながらクローズ・アッブされるようになった。

もうひとつは、徐家の系譜である「草坪・徐氏宗譜」が一九八七年に中国の江西省臨川で発見されたことである。この系譜の中には徐市という名が記されており、さらに、この系譜は清代に徐時棟がまとめた『徐偃王志』の記述とも合致するといわれている。歴史を

たどるさいに特に、系譜の信頼性については十分な検討が必要であるが、興味深い史料といえよう。

徐福については、中国から東方の日本へ向かったことと神武天皇の東征伝承とを重ね合わせて、神武天皇のこととする説などさまざまながいわれている。いずれにしても、いままで徐福という人物は、伝説上の人物として片付けられてきたという印象が強く、今後の新たな解明がまたれるところである。

